

水泳部の引退式では1年男子がフルチンになって3年女子を見送る

水泳部の伝統は、部員たちにとって絶対的な掟だった。毎年、3年生が引退する日、1年生の男子たちは全裸になって女子たちを見送る。それが、この高校の水泳部で代々受け継がれてきた儀式だ。部内の結束を強め、別れの痛みを共有するために受け継がれてきた。桐生翔太は、そんな伝統に直面した1年生の1人だった。

翔太は入部してまだ半年。泳ぎは速く、チームの期待の星だった。「本当にやるのかよ……」この掟を聞いた時は絶句した。3年生の女子、霧島凜は特に美しく、翔太の憧れの存在だった。凜はキャプテンで、長い黒髪をポニーテールにまとめ、

プールサイドで厳しく指導する姿が印象的。翔太は彼女の視線を感じるだけで、体が熱くなった。おちんちんを女子たちに見られるなんて、想像しただけで屈辱感が込み上げる。「凜先輩に俺のあそこを見られるなんて……絶対に嫌だ。恥ずかしくて死にそう」翔太は布団の中で体を縮こまらせ、夜通し悶々とした。

引退式の前日、部室でミーティングがあった。顧問の先生は欠席で、3年生の男子キャプテン、葉月蓮が仕切っていた。「明日が最後だ。伝統通り、1年生の男子はフルチンで女子たちを見送る。拒否は許さない。部活の絆だぞ」蓮の声は低く、威圧的だった。翔太の隣に座る1年生の仲間、青海悠は顔を赤らめてうつむいていた。「蓮先輩、マジでやるんですか？ 恥ずかしいですよ……女子の前でおちんちん丸出しなんて、屈辱です」悠が小声で抗議する。蓮は笑って肩を叩いた。「お前らが

入部した時から知ってるはずだろ。俺も1年の時やったよ。女子たちはそれを楽しみにしてるんだ。」

翔太の心臓が激しく鳴った。「凜先輩が……俺たちのおちんちんを見るの？」想像するだけで、下腹部が疼くような感覚が走る。凜はいつもクールで、男子の視線を冷たくかわすタイプ。でも、伝統の話を聞くと、彼女の目が少し輝くのを翔太は気づいていた。「俺、凜先輩に裸を見られるなんて……興奮するかも」翔太は自分を恥じながらも、期待が混じっていた。だが、すぐに屈辱感が勝る。「いや、そんなの変だ。女子に見られるなんて……恥ずかしいだけだ」部内の女子たちは3年生だけじゃない。2年生の女子もいるが、今回のメインは引退する凜たちだ。

その夜、翔太は家で眠れなかった。「明日、フルチンになるのか。みんなの前で

……おちんちんを晒すなんて」ベッドで体を丸め、凜の顔を思い浮かべる。彼女の笑顔、プールで濡れた水着姿。翔太の手は無意識に下半身に伸び、軽く触れた。「凜先輩、俺のおちんちんを見て、どう思うかな……」想像が膨らみ、息が荒くなる。恥ずかしさと興奮が交錯し、結局一睡もできなかった。

引退式当日。学校のプールサイドに部員全員が集まった。3年生は5人、男子2人女子3人。1年生は男子4人女子2人。2年生は男子3人女子4人。総勢18人。まず、通常の式が始まった。顧問の先生が挨拶し、3年生に花束を渡す。凜は代表でスピーチをした。「この部で過ごした3年間は宝物です。みんな、ありがとう」彼女の声は少し震えていた。翔太は後ろから彼女の背中を見つめ、心の中で呟く。「凜先輩、綺麗だ……でも、今日俺のおちんちんを見せるなんて、屈辱すぎる」

式の後半、伝統の時間になった。蓮が声を上げた。「さあ、1年生男子、準備しろ。女子たちを見送るんだ」翔太たちの顔が青ざめる。青海悠が慌てて言った。「待ってください、蓮先輩。本当に脱ぐんですか？ 女子の前でおちんちんを……恥ずかしくてできません」蓮はニヤリと笑う。「当たり前だ。伝統だぞ。脱げ」他の3年生男子、蒼井隼人も頷く。「俺らもやった。恥ずかしがるなよ。ちんちん見られるくらいで騒ぐな」

翔太は心の中で葛藤した。「俺、凜先輩に裸を見せるなんて……おちんちんをじっくり見られるなんて、絶対に耐えられない。屈辱だ」周りの1年生男子、悠と風見颯、霧生零も渋々立ち上がる。4人はプールサイドの端で服を脱ぎ始めた。